

## 文末表現「カネ」の用法について : Politenessの 視点から

著者	熊井 浩子
雑誌名	静岡大学国際交流センター紀要
巻	8
ページ	1-27
発行年	2014-03-04
出版者	静岡大学国際交流センター
URL	<a href="http://doi.org/10.14945/00007687">http://doi.org/10.14945/00007687</a>

# 文末表現「カネ」の用法について

## —Politenessの視点から—

熊井浩子

### 【要旨】

本稿では、カナとの違いも含め、カネの意味や機能、またこれが用いられる動機等について考察した。その結果、カネは話し手や聞き手の記憶や知識、感情や意向などと自分の認識を一致させながらも最終的な結論を出さず、その認識を聞き手に属するものとして聞き手に示し、さらには同意や確認などの反応を求めたりするものであることが明らかになった。また、カネはPP・NP両方の面を持つが、話し手と聞き手が同じ情報を共有することに重点をおいた表現であることから、カナに比べてよりPFに配慮したPPという面を持つこともわかった。それ故、適切に使われれば、相手との距離を縮める親しさの表現にもなりうるが、PPよりもNPが求められる相手や、話し手と聞き手が明らかに合意していないような状況、あるいは話し手が結論を出すべき場面などで用いられると、聞き手の領域に入り込んで来るようななれなれしさや強引さ、押しつけがましさ、あるいは無責任さを感じさせ、失礼と受け取られこともあるなど、相手や場面、発話内容によっては失礼な表現となってしまうこともあるため、使用には注意が必要である。

【キーワード】 カネ、ポライトネス、対人的配慮、親しさ

### 1. はじめに

私たちが言語を用いて他者とコミュニケーションを行う場合、そこにほとんど常に対人的配慮がはたらいっている。その中には、敬語のように、当事者の上下関係や距離に基づいて限られた範囲の中からほぼ自動的に適切な形を選択するタイプのものもある。日本語の配慮表現においてこの敬語が重要な役割を果たしていることは間違いないが、配慮表現は敬語に限られるわけではない。この敬語も含め、より広く配慮行動を捉えたものがPolitenessである。

B&LのPoliteness理論では、人間は他者から評価されたい、受容されたいという欲求、即ちpositive face（以下、PF）と自己の領域と自己の行動の自由を守りたいという欲求、即ちnegative face（以下、NF）という二つの相反する基本的欲求を持つとされる。そして、この基本的欲求が脅かされる可能性があるとき、その行為の侵害度（Weightiness of FTA、以下W）に応じて、それを軽減（redress）し、円滑な対人関係維持するためにnegative politeness（以下、NP）やpositive politeness（以下、PP）というストラテジーが選択されることになる。

NPはNFに配慮したもので、「距離を置く」、「聞き手の領域に踏み込まず／決定権を与えよ」など、聞き手が決定権を持つ言語行動の選択などがこれにあたる。敬語はこのNPのストラテジー5「敬意を示す」の手段の一つであると考えられる。一方、PPはPFに配慮し

たもので、聞き手に対する好意・親しさを表す言語行動の選択がこれにあたる。これらのストラテジーは日本語も含めた全ての言語に普遍的にもあてはまるとされる。

ただし、B&Lに明確な指摘はないものの、実際にはある配慮行動がNPだけ、あるいはPPだけで行われるわけではなく、Face侵害度Wが高いと思われる行為である場合には、この両者を巧みに組み合わせて行われるのが普通である。また、どの言語でも、このようなストラテジーとして、場面に応じて話者が積極的に選択できる部分と、規範によって規定された言語使用の両面が存在する。日本語に関しては特に、この敬語に基づく規範としての言語使用が重要な役割を担っているわけである。

この点に関して滝浦（2013）も、日本語においては「敬して避ける」ための作法、〈遠〉の言葉としてのあいさつや敬語などの定型表現による儀礼的交換が重視されてきたが、近い相手と交わる表現はうまく発達させてこなかった、と指摘する。「敬語型」の手段は、ある人間関係について“こう言っておけば大丈夫”という形で不確定性を捨象し、人々に「安心」を与えるが、この規範を理解していない人が用いる敬語は、コミュニケーションの安心そのものを脅かしかねないものとして警戒の対象となる。敬語の乱れがやかましく言われるのはそのためであると滝浦は考察する。

一方、「ポライトネス型」の手段は「安心」を与えるものでなく、むしろ人間関係の不確定性を前提とし、それを円滑にしようとする願う話し手の意図の表現であり、そこで前提とされるのは相手もこのような意図を持っているはずだという「信頼」であるとする。日本では、身分制度や家父長制の中で、敬語は「安心」のコミュニケーションの手段として機能してきた。しかし固定的な上下関係から流動性の高い親疎の関係へと人間関係が移行する中で、「たまたま目上である人物と親しさのコミュニケーションをとりたい」と思っても、敬語などによる距離感がそれを妨げてしまうのである。

例えば、日本語に相手の領域に踏み込まないという強い制約があることは鈴木（1997）で指摘されているが、滝浦はこれを「ポライトネス・コード」と呼び、敬語を使うべき対象である「上向き発話」では、この「敬避のポライトネス・コード」が存在し、目上の聞き手のPFに対する「共感のポライトネス」は抑制されると述べている。このような状況の中で滝浦は、“共感”をキーワードとし、丁寧さから親しさへ、コミュニケーションの「安心」から「信頼」へ目を向けていくことが日本語の直面する課題であると述べている。例えば「じゃないですか」を滝浦は旧来の用法を転換させることで人々が生み出した「共感をあらかじめ取りつけておいて自分の話をしやすくするストラテジー」であり、共感に訴える典型的なPPであると捉えている。しかし、このようなポライトネス型の手段は定番の「安心の表現」ではなく、人々に違和感を抱かせることも少なくない。

同様に、コンビニなどで多用される「いらっしゃいませ、こんにちは～！」も、違和感のある表現と指摘されることが多い。これは「いらっしゃいませ」は知らない人の距離感、「こんにちは」は知り合いの距離感をそれぞれ表し、本来並列できないはずの二つの挨拶を併用していることからくるものであるとされるが、意図通りの効果を発揮すれば、相対的に丁寧な距離感で迎えた客を親しげな距離感に引き入れるストラテジーとして機能する可能性もあると滝浦は指摘する。このように、日本語が規範に基づいた敬避の表現だけではない、親しさのコミュニケーション、また、安心だけでなく、「信頼のコミュニケーション

の担い手」として成熟していくにはまだ時間がかかりそうではあるが、その変化の芽は確実に存在するわけである。

このように、日本語では、「たまたま目上である人物と親しさのコミュニケーションをとりたいと思っても、それが規範によって抑制されていることは事実である。しかし、そのような制約の中でも、適切な範囲で、あるいは敢えてそこから逸脱するスピーチレベルのシフトや終助詞「ね」の使用、呼称を調節することなどで、距離を縮め、親しさを表現する方法は存在する。筆者は、文末表現のカネも、そのような親しさの表現の一つとして用いられる場合もあるのではないかと考える。しかし、カネについても、ジャーナデスカ同様、インターネット等でもたびたび問題のある表現として取り上げられている。本稿では、そのような批判を概観した上で、カネの意味と用法を考察するとともに、親しさの表現としてのカネの可能性について検討する。ただし、使用が年配の男性話者に限定される(1)のような用法は考察の対象から外すことにする。

(1) 「きみ、結婚する気はないかね」(挑む女)

## 2. カネが表す意味

インターネットでは、目上に対してデスカネを使用することに対する批判は多い。例えば、投稿された質問に対して一般の読者が回答を寄せる「人力検索はてな」<sup>注1)</sup>でも、子供の担任の先生に対してデスカネを使うことへの当否に関する質問に16件の回答が寄せられている。その中では、デスカネに関しては距離を近づける、対等、お友達感覚、フランク、くだけた表現というように、距離を縮める表現であるため、目上の相手には失礼、横柄な印象であるとする意見が圧倒的に多く、目上の人に対してはデスカ・デショウカを使うべきだという立場が大勢を占めている一方で、デスネ・デショウネに比べて押し付けがましさが無い、ネがあって、同意を求めているのでやわらかな感じ、意見や反論等も言いやすいというコメントもあった。また、親しい感じの上司や先輩なら使用可、「半敬語」であるという指摘もあった。多くの回答者が、カネに親しさや距離の近さを感じていることは注目に値する。

このほかのサイトでも、カネは、わからない事柄への問いに同意を期待する意を添えた表現であり、不確かなのに相手が同意するであろう予測も表す意味合いになり、場合によってはいい加減な印象、なれなれしい印象になるという指摘や、明確に「～です。」と言い切らず、カネを用いるのは、判断や判断することの意義自体を突き放すような無責任さが不快だという説明もあった<sup>注2)</sup>。

デスカネはですます体であるから、普通体を用いる相手と比べれば、なんらかの意味で距離のある相手とのコミュニケーションに用いられるわけであるが、デスカやデショウカを用いる場合と比べれば、距離感が近い印象を与え、それが相手によっては失礼な表現と受け取られる場合があるということになる。また、場合によっては無責任な感じを与えることもあるようである。それ故、多用されるとマイナスの印象を与えるが、うまく使えば、相手との距離を調節する機能を果たしうる可能性もあるということになる。

このカネについて南(1985)は、カは「表出段階」、ネは「働きかけ段階」にあり、「話

し手の疑い」を表すかに「相手の反応を要求する」ネが加わったものであるとする。カネの本質を端的に表す説明ではあるが、ネがつかなくてもカだけでも相手の反応を要求することも可能であること、カネが必ずしも相手の反応を必要としない場合もあること、さらにこれがカとどのような違いがあるのかについては必ずしも明確でないことなどの問題が残る。

次に、山田（1991）は、「か」を「質問」「確認」「主張」、「ね」を「確認」、「ねえ」を「同意要求」とし、その組み合わせによって、次の4つの機能が生ずると説明する。しかし、確認と同意要求のネからなぜ回答要求や不信の表明など、カネのさまざまな用法が生ずるのか説明されていない。

表1 山田（1991）<sup>注3)</sup>

	例	機能
①質問型のカ+ネ（確認）	今出川までいくらですか <u>ね</u> 。	回答要求のやわらげ
②確認型のカ+ネ（確認）	そうですか <u>ね</u> 。	互いに確信がもてないことの確認
③確認型のカ+ネエ（同意要求）	そうですか <u>ねえ</u> 。	不信の表明
④主張型のカ+ネ（確認）	聞いてるか <u>ね</u> 。	より強い主張

さらに、橋本（1992）では、「か」を「疑い」「問い」、「ね」を「同意要求」とし、その組み合わせにより、話し手が述べ立てた疑いを聞き手に共有してもらうことを要求する「かね1」と、「ね」が「同意要求」という意味をもつことができず、心理的な親密さを示すものに転化した「かね2」の2つに分類している。そして、「かね1」は派生的な用法として聞き手の存在を意識した疑いの述べ立てとなることもあり、その場合は「ね」は「同意要求」ではなく、疑いの述べ立ての「かな」の「な」の丁寧形として働いている場合もあるのではないかと述べている。また、「かね2」に、年配の男性が目下の人にある程度丁寧に言う場合というような「文体的価値」を認めている。この位相差をもつカネは本稿の考察から除外し、特定の位相による使用制限のない「かね1」のみを考察の対象とするが、橋本では「かね1」については、「同意要求」の「ね」と分析されるカネと「な」の丁寧形としてのカネとの関係が明確ではなく、カネの用法を十分説明しているとは言いがたい。

熊野（1999）もまた、山田（1991）、橋本（1992）について、(2)(3)のように相手に異論を唱えたり、聞き手が知り得ないことに使用するカネには、「確認」や「同意要求」という説明は不適切であると指摘している。

(2) (相手の発言に対して異論を唱える場合)

「そうですかねえ。私はそうは思いませね。」

(3) (聞き手が知らない過去の事実についてBが答える場合)

A 「ご主人と初めてデートした場所は？」

B 「どこでしたかね。」

その上で熊野は大学生を対象とした質問紙調査により、さまざまなカネの使用状況を調

べている。この調査についてはカネの機能という観点から後述するが、その結果を踏まえ、田窪・金水（1996）の指摘するようにネは話者が自分自身の認識や知識と照らし合わせている検索過程を示すものであり、カネは（4）のように話し手自身の知識や認識と照らし合わせている過程を示しているとする。そして、カで終わる文が判断を放棄して聞き手に不確定の要素を提示することで聞き手に補填を要求しているのに対し、カネはネでこの自分自身の中で判断、確認している過程があり、直接的な補填要求ではなく、基本的には話者自身にとどまるものであると結論づけている。

（4）「か」不確定＋「ね」自己照合＝かね

このように熊野は、カネを話者の自己照会の表示であり、疑いの表現に位置づけられるとしているが、熊野自身が表出の依頼で挙げている（5）のような場合には、聞き手の反応を求めており、カネが自己照合の過程のみを表し、話し手自身にとどまるものとは言いがたいであろう。

（5）すみませんが、それを持ってきてもらえませんかかね

以上触れた南から熊野いずれもがカネの用法のある面は説明しているが、全てのカネを説明できていないことがわかる。

これらのカネを統一的に捉えるために、まずネの意味から考えてみたい。日本記述文法研究会（2003）はネを、①「話し手の認識を聞き手に示す用法」、②「聞き手に確認を求める用法」③「聞き手を意識していることを示す用法」があるとする。①は（6）のような評価や感情を表す述語につく場合が多いが、そうでない場合には（7）のように、その場で話し手が調べたり考えたりしたことを心の中で確認しながら述べる、あるいは記憶を思い起こしていることを表すとされる。また（8）のように、否定的な態度表明を表す述語につくと、反抗的なニュアンスが感じられることもある。②は（9）のように、話し手の認識に対して聞き手に確認を要求するものである。③は、（10）のように話し手が発話を続ける際に、聞き手を意識していることを示し、重要な情報を伝える前提として、相対的に軽い情報をノダによって表す文に付加されたもので、間投用法に近いとされるものである。

（6）君は相変わらず強情だね

（7）A 「今、何時？」

B 「ええと。3時20分ですね」

（8）A 「そろそろ仕事に戻りなさい」

B 「嫌だね」

（9）A 「すみません。失礼ですが、田中さんですね」

B 「ええ、そうです」

（10）昨日、デパートに買い物に行ったんですね。そうしたら、中学時代の先生とばっ

たり会って、少し立ち話をしたんですよ。

つまり、ネは、話し手や聞き手の記憶や知識、感情・意向などの認識を聞き手に示したり、さらには同意や確認を求めたりするものであることになる。

以上のことから、カネをひとまず以下のように定義する。

- (11) カネは話し手が疑いをもったり判断を保留したりしていることについて、話し手が自分や聞き手の記憶・知識・感情や意向などの認識と照合せながら、それを聞き手に示したり、さらには同意や確認などの反応を求めたりするもの

カネは直接聞き手に回答を要求しない場合もあるが、常に聞き手の存在を意識していることは間違いなく、ときには確認要求や同意要求を表す場合もある。この説明であれば、自己照合と聞き手への共有の確認・同意の促し、いずれの用法も説明できるであろう。

次節以降では、このようなカネがどのような機能を持ち、どのような意図を持って使われるのか、またそれが、どのような場合に効果的であり、どのような場合に不快な表現であると受け取られるのかを考察する。

### 3. カネの機能

先に触れた熊野（1999）の大学生に対する調査では、以下のような結果が出ている。

- ① 「願望、疑い」は丁寧体・普通体ともに使用率が高い。
- ② 丁寧体での「判断」の「問いかけ、依頼」で使用率が高い。
- ③ 「意志」や「命令、勧め、誘い」、「納得」、「情意の問いかけ」は丁寧体・普通体ともに使用率が低い、または使用がほとんどない。
- ④ 丁寧体と普通体では丁寧体の使用率が高く、普通体では、「願望、疑いの問いかけ」にやや見られたものの、その使用率は低い。

表2 表現類型別「かな」と「かね」<sup>注4)</sup>

表現類型	普通体		丁寧体
	かな	かね	
働きかけ 命令	#早くしない <u>かな</u>	×早くしない <u>かね</u>	なし
勧め	#食べてみない <u>かな</u>	×食べてみない <u>かね</u>	×食べてみません <u>かね</u>
依頼	○それを持ってきてもらえない <u>かな</u>	×それを持ってきてもらえない <u>かね</u>	○それを持ってきてもらえません <u>かね</u>
誘い	#お茶でも飲みに行こう <u>かな</u>	×お茶でも飲みに行こう <u>かね</u>	×お茶でも飲みに行きましょう <u>かね</u>
表出 意志	○私はコーヒーにしよう <u>かな</u>	×私はコーヒーにしよう <u>かね</u>	△私はコーヒーにしましう <u>かね</u>

願望	○あした天気にならないか な	○あした天気にならないか ね	○あした天気になりません かね
述べ立て 疑い	○あの人独身かな	○あの人独身かね	○あの人独身ですかね
納得	#こんなところにいたのか な	×こんなところにいたのか ね	×こんなところにいたんで すかね
問いかけ 判断	○こういう書き方でいいの かな	×こういう書き方でいいの かね	○こういう書き方でいいん ですかね
情意	○どんなものが食べたいか な	×どんなものが食べたいか ね	×どんなものが食べたいで すかね

(#は、その文脈では使えないことを示す。○は使用あり×はなし。)

「願望、疑い」「依頼」「判断の問いかけ」にカネの使用率が高かったことについて熊野は、「願望、疑い」については、「疑いの表現」として、カネの基本的機能が果たされており、「問いかけ」や「依頼」については、カネを使用することで、情報や行為の提供を想定していない発話として、丁寧さの表現効果を生むとする。そしてこれは「疑いの表現」の派生的機能である問いかけの特徴を示すものであると述べている。この「疑い」と「問いかけ」の違いは、仁田（1991）の指摘するとおり、前者が（a）疑い（b）情報所有の想定（c）問いかけの3条件を満たしているのに対し、後者は聞き手の回答を想定せず、（b）を満たさないことから、回答の義務を軽減することによって丁寧さの表現効果を持ち、逆に、聞き手の感情、意志など聞き手に明らかなことの「問いかけ」で「疑い」の形式を用いるとぶしつけで、不自然な表現となるとされる。

「判断の問いかけ」では使用が見られたが、聞き手の感情や意志・意向などを問う「情意の問いかけ」では使用が少なかったことについても、この仁田の指摘するとおり、話者が判断を放棄する典型的な問いかけの方が適切であり、婉曲的な疑いの表現で聞くのは不自然、またはぶしつけであるためであると熊野は考察する。

そのうえで熊野はカナとカネは同様の機能を担っており、少なくとも普通体では「かな（かね）」、丁寧体では「かね」が「疑い、願望、(意志)、依頼、判断の問いかけ」文で使用されているという共通の特徴があり、カナと丁寧体のカネとは対応関係にあるとしている。宮崎（2002）も、「カナ」は独話性の疑いの形式であり、「カネ」はその対話バージョンであるとしている。ただし、この場合、老年男性語的として独特の位相で用いられるカネは、問いかけの一種であり、この疑いの形式であるカナとは直接関係のないものとして区別している。

このカナについては、日本語文型辞典で以下のように説明されている。

- (12) 疑問を表す「か」に「な」がついたもので、文末に用い、自分自身に問いかける気持ちを表す。ひとりごとで不思議に思う気持ちや疑問の気持ちを表すが、聞き手に向けられたときは疑問の表明で、そこから遠回しに許可を求めたり、依頼したりする気持ちを表すこともある。丁寧体にはつかない。くだけた話しことば。（後略）



日本記述文法研究会（2003）も、疑問文による依頼は（13）のようにカナなどの疑いの疑問文の形式を付加することによって、さらに丁寧な依頼にすることができると述べている。

（13）君から田中さんに連絡してくれないかな。

この点については安達（1999）も、カナを疑いの表現と位置づけ、独話的な用法を基本的特徴としながらも、対話的用法を認め、これを質問用法と応答用法に分ける。質問用法はさらに、（14）のように、相手が回答を知っているという想定が成り立たないことを動機とした〈応答を強制しない質問〉と（15）のように、相手への気づかいを示しながら問いかけている〈聞き手への配慮を表す質問〉に分けられる。

（14）「浜つねは、もうあいてるかな」(略)

（15）（部下の落ち度になりかねない内容について）

「今の話は、若松課長に報告してあるのかな」(略)

また、応答用法は、独話的用法の判断過程を対話的に用いたもので、（16）のように、相手からの問いかけに対して、明確な応答はできないものの、最も妥当だと思われる可能性を伝えるものである〈不確かな応答〉と、（17）のように相手の言った内容に対して、話し手が相手の考えに沿った判断を成立させられないということを表し、それによって暗に否定的な態度を伝える〈不信の表明〉に分けられる。

（16）「どこに泊まるんだ」

「わかんね。友だちとこかな」

（17）「(略)でも、桜木さんに聞いたらわかるんじゃない？」

「かもしれないけどさ。(略)こんなものの替えなんか持って、ホイホイ来てくれるかな」

このようなことから、カナは相手が答えられないかもしれないことや、聞きづらいこと、はっきり答えられないこと、あるいは相手の判断に賛成できないことなどに用いられるということになるが、これを先に触れたBrown & LevinsonのPolitenessの枠組みに当てはめると、聞きづらいことをはっきりと断定せずに疑いという形で曖昧に述べる場合には、相手に踏み込まれたくないというNFに配慮したNPとして機能し、聞き手が答えられないかもしれないことを聞く場合や、話し手が情報提供をする場合、あるいは相手に賛成できない場合などに用いられる場合には、相手のPFに配慮したPPとして機能することがわかる。また、通常普通体とともに用いられることから、日本語文法辞典は、「くだけた話しことば」とされているが、あたかも独りごとのようにつぶやくのであれば、目上の相手の場合でも使うことは可能であり、話しことばではあるが、くだけた表現ということではできないであろう。

カネは一般にこのカナの文体的変異とされ、熊野もカナと丁寧体のカネとは対応関係にあるとしている。確かに上で挙げたカナの対話的用法はカネにもあてはまると思われる。しかし、カナがNP・PPという配慮の表現であり、カネとカナが同じ機能を持つのであれば、丁寧体とも用いることができるカネのほうがより丁寧であるということになりそうである。しかし、実際にはもっぱら批判されているのは丁寧体+カネであることから、カネをカナの丁寧体として片付けることができないことがわかる。また、普通体とともに用いられるカネも存在する。つまり、カナとカネの違いは単なるスピーチレベルの違いにとどまらないことになる。そこで、以下カネの機能について、カナとの違いも含めて考察することにする。

### ● 働きかけ

熊野の調査では、命令の使用がなかったということであるが、熊野が尋ねているのは「早くしないかね」である。しかし、命令の機能を持つ表現はさまざま、例えば、Vテモラウは命令・指示の機能も持つが、(18)のようにこの形であれば丁寧体+カネは用いられる。普通体も使用可であろう。一方カナは不自然となる。命令は強い行為指示であり、他者への働きかけの弱いカナとは矛盾がある。これが命令形にカナが使われない理由であろう。

- (18) ?あなたに行ってもらかな／あなたに行ってもらいますかね／あなたに行ってもらかね

依頼については、熊野では丁寧体のみで使用されるという結果であった。確かに(19)(20)のように、カナや丁寧体でのカネだけでなく、普通体+カネは、用いられないわけではないが、押しつけがましい、あるいは位相差を感じさせる表現となる。

- (19) ここに書くのやめてもらえませんかね…†<sup>注5)</sup>  
 (20) それを持ってきてもらえないかな／それを持ってきてもらえませんかね／?それを持ってきてもらえないかね

誘い・勧めについては、熊野では丁寧体・普通体ともに使用がなかったということであるが、インターネットでは、(21)(22)(23)のように、誘いについては、丁寧体・普通体ともに使用例があった。一方、カナは、話し手の意志を表す表現になってしまい、通常誘いには用いられない。

- (21) 今回はこのAthlete Robotをもう少しじっくり見てみます。とりあえず、2007年段階のホンダAsimoの走りと比べてみましょうかね。†  
 cf. 比べてみようかな／比べてみようかね  
 (22) お茶でも飲みに行きましょうかね†  
 (23) いっしょに帰ろうかね。†

また、勧めは、いずれの形も可能ではあるが、(24)のように、どうしてしないのか、すべきだというニュアンスが生じ、押しつけがましい印象になる場合もある。

(24) もう少し、数学とか統計学を勉強したらどうですかかね… †

ネには同意を求める機能があるため、働きかけに使われるとなぜしないのか、当然すべきだというニュアンスが生ずることもある。これが、命令はいいが、依頼や勧め・誘いに用いられると場合によっては押しつけがましい印象になる理由であろう。

## ● 表 出

意志については、(25) から (28) のように、全ての形で使用可とされているが、インターネットなどでも、Vヨウ、Vマシヨウいずれの用例もあった。

(25) 皆モリモリ食べてますか？それでは私も頂きましょうかね♪ †

(26) M氏の転職先は、ある外資系金融機関のようです。そこでM氏は、Regional Manager（日本支社長）に就任することのこと。少し落ち着いたら早速訪問して、仕事の1つでももらいに行きましょうかね。 †

(27) エレキベースもメンテしようかね。 †

(28) 今度行ってみようかね †

cf. 今度行ってみようかな／今度行ってみましょうかね

自己の意思の表明であれば、本来聞き手を意識しない自分自身に向けた発話で充分だが、カナにすると、まだはっきりとは決めていないという感じになる。一方、丁寧体+カネを用いると、聞き手に向けて意志を表明することで、自分の意向を伝えつつ、合意や許可などの相手の反応を確認する表現となり、場合によっては聞き手を意識して、ちょっと茶化したような、冗談めかして言うようなニュアンスを帯びることもある。カナにそのようなニュアンスはない。普通体のカネはカナに比べるとぞんざいな印象になる。

なお、(29)のように、動詞動詞は意向形を用いなくてもマス形・辞書形で意志を表すことができる。この場合、マス形や辞書形+カネは可能であるが、辞書形+カナは別の意味になってしまう。

(29) ?行くかな／行きますかね／行くかね

Vナイカのような願望にはカナも普通体・丁寧体のカネも用いることが可能である。ただし、普通体のカネは粗雑な印象がある。丁寧体のカネは、聞き手がコントロールできない事態であれば問題ないが、そうでない場合には、カナが遠慮がちな希望の表明となるのに対し、カネはいらだちや不快感の表明にもなる。(32)のように、聞き手の負担や利害と関わるような事態の場合には、特に失礼な印象になる。

- (30) 梅雨飛ばして早く夏にならないですかね。†  
cf. 梅雨飛ばして早く夏にならないかな／梅雨飛ばして早く夏にならないかね
- (31) 早く終わらないですかね。†
- (32) 私ももらえないですかね。†

また(33)から(35)のように、VタイやVホシイのような、話し手の願望を直接的に表す表現には、カネは用いられない。これは、カナは自分に問いかける形式であるため問題ないが、カネは自分に属すはずの感情について聞き手にその疑問を投げかけていることから生ずる不自然さであると思われる。ただし、Vタイノカのように、ノダを付けると、自分の感情を客観的に捉えたうえで相手に問いかけていることになり、不自然ではなくなる。その場合は、どの形も可能である。

- (33) Vたいかな／?Vたいですかね／?たいかね
- (34) ほしいかな／?ほしいですかね／?ほしいかね
- (35) Vたいのかな／Vたいんですかね／たいのかね

#### ● 述べ立て

述べ立てていることが正しいのではないかという疑いについては、以下の例のようにカナ・普通体および丁寧体のカネいずれもよく用いられる。

- (36) 作業量も増えるので、他と兼ねていては、仕事量としてはもう扱いきれなくなるんじゃないですかね。†
- (37) ○○○氏がメチャクチャ胡散臭いんですが、あの人って××党の広告塔ですかね?†
- (38) ん～ 割烹なんでしょうかね?†  
cf. \*割烹なんだろうかな?/\*割烹なんだろうかね?
- (39) 北条「ここで会う人ってさ、彩夏ちゃんが芸能人の小松彩夏って知ってるの?」  
彩夏「たぶん知らないんじゃないですかね。言われたことないですから」†

ところで、このデショウはカネはつくが、(38)のように、その普通体のダロウにはカナはつかない。これについては後ほど考察する。

(40)と(41)は、カネとカナが併用されている例であるが、カナが自分に対する疑問の吐露、カネがそれを聞き手に向けての発話であることを示す典型的な例であると言える。

- (40) 「私、愛なのかなあ。愛なんですかね、今がね」†
- (41) 脈ないのかな。ないかね～。†

また、述べ立てていることが正しくないのではという疑いを表す場合にも(42)のよう

に、カナ・普通体および丁寧体のカネいずれもよく用いられる。これらには、反語としての用法も認められるが、その場合カナに比べてカネのほうが、いっそうその主張が強く感じられる。

(42) タバコを憎んでどうするのですかね? †

cf. タバコを憎んでどうするのかね/タバコを憎んでどうするのかな

このような言い方については、明確に言い切らず、判断や判断することの意義自体を突き放すような無責任さが不快だというコメントがあったことは先に触れたが、自分がきちんと判断すべき時に、このカネを用いると相手に判断を丸投げしているような不快感を抱かせることがある。一方カナを用いて形の上では独話的に言う場合や、(43)(44)のように、ノダを用いる場合には問題ない。

(43) やはり“ゆとり世代”だからなんですかね。†

cf. やはり“ゆとり世代”だからなのかね。/やはり“ゆとり世代”だからなのかな。

(44) (自分について) やっぱり寂しいんですかね †

納得に使われると、カネは感嘆の意味になるが、男性・老人という位相を感じさせる用法となる。カナについてはこの意味で用いることはできない。この点は熊野の指摘するとおりである。

### ● 問いかけ

熊野は「判断の問いかけ」は、丁寧体で用いられ、カネを使用することで、情報や行為の提供を想定していない発話として、丁寧さの表現効果を生む一方で、「情意の問いかけ」は失礼にあたるとしている。しかし、実際の用例では、(45)から(47)のように、「判断の問いかけ」には普通体プラスカネの形も用いられている。

(45) マッサが3連覇を達成した際のインタビューでは『これで永住権をもらえるかね。』と笑顔でジョークを語った。†

(46) それとも自分から白タクって名乗って現金とか物々交換にしてもらうのかね? †

(47) どうしたらニートを減らせるのかね? †

一方、熊野(1999)の調査で「情意の問いかけ」の使用がなかったことについては、聞き手の感情や意志・意向などを問う場合には(48)のように、話者が判断を放棄する典型的な問いかけの方が適切であり、婉曲的な疑いの表現で聞くのは不自然、またはぶしつけであるためであると考察されていることは前にも触れたとおりである。ノダを用いると、カナでは問題ないが、カネではいっそうその失礼さが増す。

(48) どんなものが食べたいですか。

cf. どんなものが食べたいかな／？どんなものが食べたいですかね／？どんなものが食べたいかね

宮崎によれば、ナはその場で思ったこと、感じたこと、気づいたことを述べるという認識の意味を持ち、これに聞き手への持ちかけという伝達性が加わったものがネである。そして、ネは話し手がその認識を独占している場合には積極的な働きかけ性をもたないが、(49)のようにその認識を共有できる場合には、聞き手に同意や確認要求を促すような働きを帯びると述べている。例えば、気づいたのが聞き手の意図に関することである場合には、聞き手に問い質すような働きを持つことになる。

(49) 君のこと、昼間からずっと尾け回して、一人になるところを寄ってきたって言うの？君も結構、自惚れが強いんだね

同じように、カネも聞き手の願望について聞くと押しつけがましい印象となる。しかし、一方で願望は、聞き手の私的領域であり、そこに直接的に踏み込むことは好ましくないという制約が働くため、聞きにくい質問ということで、カネが選択される可能性もある。興味も願望と同様であるが、この場合、カナが相手のことを自分の領域に取り込んで一方的に判断している印象であるのに比べれば、カネは相手に働きかけている印象があり、(50)のように、さほど失礼にならない場合もあるのではないかと思われる。普通体のカネは特別な位相で用いられる。

(50) ロトコブ：人間は理解したい動物です。(略) 私は自然を理解したいというのがモチベーションです。

大井：どうして自然を理解することに興味を持ったんですかね？ †<sup>注6)</sup>

表3

表現類型		普通体		丁寧体
		かな	かね	
働きかけ	命令	×	○	○
	勧め	○	○	○
	依頼	○	△	○
	誘い	×	○	○
表出	意志	○	○	○
	願望	○	○	○
述べ立て	疑い	○	○	○
	納得	×	×	×
	判断	○	○	○
問いかけ	判断	○	○	○
	情意	○	△	△

○使用可、△使用可だが、注意が必要、×使用不可

表3は、以上の考察から筆者が熊野にならい、カナとカネ（普通体・丁寧体）の使用可否をまとめたものである。特別な位相での使用を除く一般的な使用を見ると、述べ立ての「納得」はどの形でも使用不可、働きかけの命令と誘いはカナでは用いられず、逆に問いかけの情意は、カナでは用いることができるが、カネは丁寧体・普通体ともに、使用に注意が必要となる。依頼では普通体は不適切になる場合もある。それ以外はどの形も使用可であった。

### デショウカネ

さきほど、デショウカについては(51)のようにデショウカネが可能である一方で、デショウカの普通体がダロウカナのようにならないことに触れたが、<sup>注7)</sup>ここで、この点について考えてみたい。

- (51) ん～ 割烹なんでしょうかね? †  
cf. \*割烹なんだろうかな?

以下のように、デショウカネが用いられている例は少なくない。その普通体にあたるダロウカネもそれほど使用頻度は高くないが、全く用いられないわけではないようである。

- (52) こういうのって、因果応報っていうんでしょうかね †  
(53) 王子とソフィアさん、王女とクリスさん、この2カップルも婚約が近いんでしょうかね †  
(54) 長所：あるんだろうかね †  
(55) goo ランキングどうだろうかね。 †  
(56) 今年の山形県産の岩ガキは、どうだろうかね? †

ダロウには(57)のような推量の他に、(58)のような確認要求の用法があり、さらに(59)のようにカを伴って疑いの文を形成するとされる。

- (57) 彼は来ないでしょう。  
(58) 明日行くでしょう?  
(59) 田中さんは来るでしょうか?

このダロウカで表される疑いの文の特徴について、安達(1999)は以下のようにまとめている。

- 1) 聞き手の存在を前提としない。したがって、独話(心内発話を含む)でも使用することが可能である。
- 2) a. 聞き手がその疑問に答えることができないと見込まれる状況で使用される。  
b. 聞き手に対する丁寧さを上げた疑問文として使用される(特に丁寧体をとる場

合)。

2)aに該当するのは(60)のような場合である。疑いは基本的に聞き手を前提とせず、話し手限りのものであるが、対話で用いられた場合には2)のような派生的特徴を帯びることになる。このように、ダロウカはカナと共通の特徴を持つとされる。カナがダロウカとともに用いることができないのはこの意味の類似性のためであろう。

(60) (時計を持っていない相手に)

「今、何時だらうか」

「さあ、だけどまだ三時にはならないよ」

ではなぜ、デショウ／ダロウカネは用いることができるのであろうか。カナは対話で用いることもできるが、独話を基本とする。これにネで聞き手に対する意識を付与したものがカネとなる。同じようにダロウカにこの聞き手に対する意識を付与されたものがダロウカネとなるのではないだろうか。そして、デショウカが聞き手に判断を求める問いかけであるのに対し、デショウカネは、話し手も考えつつ、相手に同意を求める表現となり、協調的で親しい感じの問いかけとして用いられることになる。

以上の考察から、働きかけのないカナが命令や勧めでは用いにくいのに対し、カネは可能、逆に情意の問いかけはカナは可能であるが、聞き手の私的領域に属する情意の問いかけに関しては、カネが聞き手に問い質すような働きを持つとするため、失礼になる場合がある一方で、遠慮がちに尋ねるということでカネが選択される場合もあることなどがわかった。さらに、デショウとカナが同じように機能を果たすため、カナとは共起しないが、カネは可能であることも明らかになった。このように、カネは、カナと同様の用法を持ちながら、この聞き手に対する意識が付与されていることにより、スピーチレベルの差以外にも微妙な差異が生ずることがわかる。筆者はこれが、その情報が話し手／聞き手のどちらに属するものとして捉えるか、あるいはどちらが最終的な判断を下すべきこととして描かれるのかの違いによるものであると考える。事項でこの点について考察する。

#### 4. カネを用いる意図・動機

では、小説やインターネット、実際の使用例も含めた用例から、さまざまな機能を持つカネがどのような意図・動機によって用いられるのかについて考察する。カネを用いる最大の動機は、カナが普通体でしか用いられないため、丁寧体の時にカナと同じような機能を持たせて使用するということであると思われるが、カネの場合、自分自身に疑問を投げかけたあとで、ネで聞き手を意識してその疑問を発信し、時には確認や同意を求めたりする意味が加わる。そこからカナとカネの微妙な差異が生ずることになる。

##### ● 話し手の疑いの確認

(61) は、警視庁の捜査の手が伸びていることについての、新聞社政治部長と総理大臣



との電話での会話である。話し手自身が「猶予がない」のではという疑いを持っていることがらについて、聞き手の認識を確認しているという状況である。カにすると、明確に回答を求める質問になってしまうため、自分で考えるというよりは、相手にすぐさま答えを求めているような早急な感じがし、場合によっては詰問しているような印象になる。カネを用いると、自分で考えて答えを探しつつ、相手にその考えを確認するという印象になり、この詰問調がやわらぐ。一方、カナは、自問自答しているような印象になる。

- (61) 「(略) おそらく、この件を現時点で知っているのはうちの社くらいなもんだと思いますよ。まもなく撥ねるでしょうけど」  
「余り猶予がないってことですかね」(警視庁情報官)  
cf. 猶予がないってことですか／猶予がないってことかな

(62) は、裁判の映像がテレビ中継されると考えて、冗談を言っている裁判長の発言に対する判事補の言葉である。これも「流れるだろうか」という話し手の疑問に対し、聞き手の認識を確認する用法である。カだと、相手が流れるかどうか確実に知っているような印象になるが、カネを用いると、相手が言ったことを受けて、自分でもどうだろうと思いつらしながら、聞き手に確認している印象となる。カナにすると、その情報が相手に属しているものではなく、それ故相手が確信をもっているものではないという意味を感じさせて、場合によっては相手に反論しているような失礼な印象になる。

- (62) 「襟足は映らないからいいでしょう (後略)」(略)  
「流れますかね？」(略)  
「流れるでしょう」(火の粉)  
cf. 流れますか／流れるかな

(63) は、online新聞の対談から取った起業家TとIの対話<sup>註8)</sup>である。Tは対談のホストであり、Iは年齢的にもキャリアからもTの先輩格にあたる。それを反映して対談は、Tが質問し、Iがそれに答えるという形で進み、用いられる言葉もTが一貫して丁寧体であるのに対し、Iは普通体、それも文末にジャンを多用するなど、くだけたスピーチスタイルを取るという好対照をなしている。つまり、役割・年齢・キャリア・情報量という意味でTが上位の立場にあり、選択される言語表現もこれに倣っていることになる。

ある国際的な企業についてIが評価する過程で、言語や論理で説明・再現しにくい領域が競争力を生み出しているという説明がある。TはそのIの説明を短くまとめたうえで、その説を前提とした質問を「ですかね」という形でIに投げかけ、情報要求を行っている。

- (63) I : (前略) 何が言いたかったかというと、言語や論理で再現しにくい領域、もうちょっと人間側から言うと、テンションが上がったり、すごい感動したり、何らかのインパクトを受けるんだけど、その感動を言語で説明したり、論理で説明したりできないような領域、もしくは説明したところでほとんど

意味がない領域。そういうものは、説明しにくいがゆえに再現しにくい。再現方法を共有しにくい。再現方法が共有しにくいがゆえに差異を生むんだよ。競争の差異を。競争の差異を生むがゆえに、その領域が競争力の源泉になっていくと思うんだ。

- T: 言語や論理で説明できない領域が、今後の競争力の源泉になっていくとする  
と、今、最も競争力が強い企業ってどこですかね? †
- cf. 今、最も競争力が強い企業ってどこですか? / 今、最も競争力が強い企業ってどこかな?

カを用いると、相手に一方的に情報を求めている印象になるし、場合によっては相手を疑って尋問しているような感じになるが、カネにすると、相手の情報を受け取った上で、それに関連する情報を話し手自身も考えながら、知りたいと思っていることを伝える役割を果たす。この場合、明らかに聞き手の反応を求める対談での発話であるから、カナでは独話のようで不自然となるし、情報を相手に属するものであると捉えていることが伝わらない。

(64) は留学相談中の教員と学生の会話である。

- (64) A: 受け入れ許可証が届いたら、すぐ就学許可証の申請をしてくださいね。けっこう時間かかるから。
- B: 就学許可証ってどのぐらい時間かかるんですかね。 †
- cf. 就学許可証ってどのぐらい時間がかかるんですか / 就学許可証ってどのぐらい時間がかかるのかな

これも相手の言ったことを踏まえ、相手がそれに関する知識や情報を持っているという予想のものに、疑問に思っていることを伝える表現となる。カナではその情報が相手に属している、あるいは相手が情報を持っているという予測をもとに疑問を伝えているという意味にならない。また、もし相手が許可証発行の担当官であれば、話し手が疑いを差し挟む余地はないから、疑いではなく、カを用いてストレートに質問するのが普通であろう。このように、相手が明確な答えを持っていることが要求される場合にカネを用いると失礼な印象を与える可能性もある。

これらのことから、カネは、カによる疑問文と違って、不確かながら、いったん話し手自身が「こうかな」と考えたことを聞き手に伝えている表現であることがわかる。即ち、自分が疑いを持っていたり、判断ができなかったりすることについて、一度自分の領域に取り込んで、自分でも答えを探しつつ、それを相手の領域に投げかけてその疑問を聞き手と共有し、さらには確認や同意、情報提供を求める表現であるということになる。このようなカネは、相手と自分の一致を求めるPPの一種であると言える。

#### ● 聞き手も答えられないかもしれないこと

以上は、聞き手がある程度答えを持っていることを話し手が期待した表現であるが、(65)

(66) は、相手が答えられないかもしれない情報について、相手に答えを強制せず、疑問を相手と共有しようとする表現となる。なので、仮に相手はその答えを持っていないとしても相手の face を傷つけない。ただ、前の例同様、相手の発話がきっかけとなっていることから、それが何らかの形で相手の領域に属する情報であり、相手がある程度の答えを持っているかもしれないという予測があることも併せて示している。カナにはそのようなニュアンスはなく、聞き手の知識と関係なく、自分の疑問を述べる表現となる。また、カにすると相手が答えを持っていると考えていることになる。

- (65) 加賀美は彼の脇からのぞきこみ、たくさんのアクセサリーがあるが、指輪がないことに気がついた。それを口に出すと、仁科が首をひねった。  
「どうしてですかね」(返事はいらぬ)  
cf. どうしてですか／どうしてかな
- (66) A：在来線も結構止まりますよ。  
B：今回はどうだったんですかね。†  
cf. 今回はどうだったんですか／今回はどうだったのかな

このように、カネは、相手も確信を持っていないかもしれないことについて遠慮がちに尋ねる場合に用いられる配慮表現としてはたらきがあることがわかる。それ故、(67) のように、相手も必ずしも答えをもっていなくてもいいわけである。カは明快な答えを期待する表現となる。

- (67) (暴力団の組長と手下の会話)  
「この辺の熊の種類はなんですかね」  
「そんなこと知るか。(後略)」(警視庁情報官)  
cf. この辺の熊の種類はなんですか

● 聞きにくいことを遠慮がちに聞く

カネはまた、聞きにくいを、遠慮がちに聞く場合にも用いることができる。(68) は、自分が不安に思っていることを相手に配慮しつつ聞く言い方となるが、これも話し手が答えは聞き手に属する情報であると感じていることがわかる。

- (68) 「(略) これ、安心して食べてもいいものでしょうかね」  
「どうぞ、安心してお召し上がりください」(震える牛)

(69) は電話による一斉予約開始の連絡を業者から受け、昨年度の電話のかかってくる様子を聞いている状況である。一斉に予約を受け付けるということで公平さを保つシステムであるのに、そのような内部事情を聞くのは凶々しいと感じて、ややためらいながら質問している。カのみだと、聞きにくいことを遠慮がちに聞くというニュアンスはなくなる。(70) も同様である。

- (69) A：去年は開始時には4台ある電話が鳴りっぱなしっていう感じでしたね。  
 B：そうですか。何時ぐらいになったら収まりますかかね。†  
 cf.：何時ぐらいになったら収まりますか／何時ぐらいになったら収まるかな
- (70) 「写真をみたら、車両を特定してもらえますかかね」  
 「多分、だいじょうぶよ」(震える牛)

そこから、前節で触れたように、遠慮がちに依頼や誘い・勧めなどの行為要求としても用いられることになる。この場合のカネはNPである。

● 相手が賛成してくれると期待する情報の確認

(71) から (73) は、相手の知識や情報、その場の状況などから、聞き手がおそらく賛成してくれると話し手が期待することがらについて確認するときにも用いられる。この場合も、相手の知識や情報という前提がない場合にいきなりこの形が用いられると、違和感のある表現となる。カナだと、相手はその情報を持っているという前提はない。またネのないカだけを用了場合は、話し手がその事柄を正しいと感じているかどうかは不明である。

- (71) じゃあそれを右に回してください。  
 これでいいですかかね。†  
 cf. これでもいいですか／これでいいかな
- (72) (テレビのインタビューでカメラに向かってCDを見せながら)  
 A：見えますかかね。  
 B：見えますよ。†
- (73) 「なにをお知りになりたいのですか」  
 「オックススマートが強請られているなんて噂は聞いたことがありませんかかね」(震える牛)  
 cf. 「オックススマートが強請られているなんて噂は聞いたことがないかな」

一方は、(74) はそういう情報の共有という前提がないため、場合によっては失礼な印象となる。

- (74) こういう無駄に学歴だけあるヤツが2ちゃんて高学歴自慢してんのかかね? †

● 相手が自分と違う意見・判断を持っているかもしれない場合

上の例と逆であるが、自分の意見はある程度持ちつつ、最終的にはそれを聞き手に委ねていることから、相手が自分と違う意見を持っているかもしれない場合、相手が自分に反対しやすいような状況を作ることができる。(75) は、いっしょに文書を作成している場面で、話し手は枠があったほうが良いと考えて枠を付けたが、相手の言動からいらなそうに思っている可能性もあるため、相手に疑問を投げかけて反応を待っている。結論を相手に

委ねていることから、相手もいらないと言いやすいし、話し手もそれを前提に話しているため、それほど傷つかずにすむ。(76)も、状況から話し手は売り物ではないと考えているが、自分で結論を出さず、相手に判断を委ねている。カナにすると、相手がそういう情報を持っているという前提はないという印象になる。

(75) 粋はいらないいですかね。†

cf. 粋はいらないいですか／粋はいらないいかな

(76) (売り物とは思えない古いドリルを見て)

「(略) これって売り物なんですかね」

「どういうことだい」(ようこそ、わが家へ)」

cf. これって売り物なんですか／これって売り物なのいかな

このように、カネは相手が自分と同じ認識を持っているかもしれないと話し手が思っている場合だけでなく、自分と違う認識を持っているのではないかと感じる場合にも用いることができることになるが、これは話し手が自分で断定せず、判断を聞き手に委ねていることから、前者の場合でも、押しつけがましくならず、また後者の場合にはたとえ意見が違っても、お互いのfaceを傷つけずにすむためであると思われる。

#### ● 相手を責めている印象を薄めるため

(77)は相手に対する批判であるため、かだと詰問調になるが、カネだと最終的な判断を相手に委ねている感じがあり、相手の状況に配慮した印象となって、それが和らぐ。前述のように、ダロウカナは不可能である。

(77) これってもっとシステムティックにできないんでしょうかね? †

cf. これってもっとシステムティックにできないんでしょうか／

\* これってもっとシステムティックにできないんだらうかな

#### ● 話し手の推理や認識を伝える

断定を避ける用法には、話し手が答えを持っている場合もある。(78)も、相手の話から話し手がある推論を立てるが断定は避け、相手と疑問を共有しようという言い方になる。これもかだけだと、相手に答えを要求する表現となる。ただし、「でしょう」が用いられているので、そうでない場合よりは柔らかくはなっている。前述したようにデショウの普通体ダロウを用いたダロウカナは使用できない。

(78) 「(略) カオちゃんとか、言っていたような気がします。ごめんなさい、確かなことは言えませんが」

「カオリとか、カオルとか、あるいはカオルコとかでしょうかね」

田川は蛇腹メモに複数の仮定の名前を記した。(震える牛)

cf. カオリとか、カオルとか、あるいはカオルコとかでしょうか／\*カオリとか、

カオルとか、あるいはカオルコとかな

(79) は、友人が悪の道に走った理由について、話し手が自分の考えを述べている場面である。不確かであれ、情報を持っているのは話し手なので、カではおかしいが、カネを用いると自分の想像・推理を示しつつ、相手に判断を委ねる表現になる。

(79) 「根は悪い奴じゃなかったんですよ。野球で挫折したのがきっかけですかかね」  
「野球？」(震える牛)

cf. 野球で挫折したのがきっかけですか／野球で挫折したのがきっかけかな

(80) も話し手の判断を表す例である。監視カメラをチェックし、映っている人の年齢を特定しようとしている際に、先輩刑事の質問に答える場面である。話し手も同意見ではあるが、格下の自分が結論を出すのではなく、あくまで自分の考えを示しつつ、最終的には相手に判断を委ねる配慮表現となる。

(80) 「わりと若いように見えるが、どうだ」

津原もそう思う。

「(前略) 先入観を持ち過ぎるのはどうかと思いますけど、二十代から、三十代半ばまでとっていいんじゃないですかかね」(ハング)

ただし、断定的に述べていないことから、間違えた場合の自身のPFの侵害を軽減できるというメリットもある。

また、状況によっては冗談めかして自分の認識を伝える(81)のような用法もある。

(81) 「ああ、黒さん、懐かしい。ちょっと若くならない」

「最近、よく言われるんです。楽しんでるからでしょうかね」(警視庁情報官)

● 遠慮がちに情報を提供する

これと似た用法として、話し手が自己の持っている情報を遠慮がちに提供する(82)(83)のような用法もある。(82)は、「近いです」と言い切ると、相手の知らないことを教えているという感じになり、場合によっては相手のPFに対する侵害となるが、カネを用いると、相手も知っているかもしれない、あるいは自分も100パーセント確信を持っているわけではないというニュアンスになり、相手に配慮した言い方となる。(84)も同様である。

(82) 大井 お父さんは何してる人なんですか？

ロトコブ アー、心理はサイコロジーですよ。(略) 頭痛から神経の病気までの医学をやります。

木村 日本語で言うと精神科医になるんですけど、神経科医のほうが近いですかね。(略)<sup>注6)</sup>

(83) 新幹線に乗ったか、静岡駅にいるかというところですかね。†

(84) は、ある研究会の分担を話し合っている場面で、全体の責任者がある部署の担当者の質問に応じて提案する場面であるが、より情報の多い話し手側が断言はせず、自分と相手が情報を共有していることを示しつつ、相手に了解を求めていることを表す。デスネであれば、それが既定の事実である印象になる。

(84) (自分たちの部署は何を担当すればいいかを聞かれ)

懇親会の予算と、あとは進行の部分ですかね。†

cf. 懇親会の予算と、あとは進行の部分ですね

カネは疑いの表現に同意を求めるネがあるため、押しつけがましさを軽減しつつ、話し手と聞き手が情報を共有することが可能となる。

一方で、(85) で指摘されているように、はっきりと述べるべき場面でカネを用いると、無責任・投げやりな印象を与えることは前に触れたとおりである。

(85) 新人が取引先で「～ですかね？」連発してた(後略) †

ビジネスの場面など、自分の領域、あるいは自分が判断を下すべきものについて、カネを用いると、突き放すような「無責任さ」、を感じさせる不快な表現となる場合があるわけである。(86) も同様である。カナにはそのようなニュアンスはない。

(86) 「どこに泊まるんだ」

「わかんね。友だちとこかな」

cf. わかんね。友だちとこかね

### ● 記憶を辿りながら話すとき

カネは、話し手が記憶を辿りながら話す場合にも用いられる。

(87) (ヴァイオリンを始めたきっかけについて聞かれて)

「(略) できる楽器がなかったので、自動的に『じゃヴァイオリンね』と。それで始めました。」

—え、ちょっと待ってください。それいくつのことですか？

「18ですかね。」 †

この場合、自分でもはっきりしないことを、記憶をたどりながら話している状況なので、自分自身についてのことでも問題ない。

● 説明や表現がむずかしいこと

(88) から (90) は、ある状況を説明しようとしているが、その説明が適切かどうかかわからず、相手がそのような言い方・たとえで、状況を理解してくれるかどうか、確認する言い方となる。「～という感じ／ところ」などの表現とともに用いられることも多い。これも相手に判断を委ねる表現である。

(88) …たぶん、最初は怖かったですよ。来てから三日かそこらのあいだは。もう忘れちゃいましたけど。今はまあ、べつに、そりゃあ、見て嬉しくはならないですけど。ああ、いるなあって感じですかね。†

(89) 旦那も旦那なら、友達も友達…と言ったところですかね。†

(90) またもや、急性難聴です。(中略) 私にとって耳の風邪みたいなものですかね。†

● 相手を訂正する

この情報提供には、(91) のように遠慮がちに正しい情報を提供することで、相手を訂正する用法もある。直接的な訂正に比べて断定的ではなく、聞き手もその情報に関与し、本当は聞き手も正しい情報を共有しているという前提で、話し手の疑いを示して聞き手の確認を得ようとする、配慮のある表現となる。カナも可能ではあるが、話し手限りとなり、場合によっては疑問を呈しているような印象になる。また、明らかに聞き手が同意しないような場合の訂正は逆に失礼になる。

(91) さっき、山田さんが来ましたよ」

「ああ、山下さんですかね。」

cf. ああ、山下さんですか／ああ、山下さんかな

● 相手が否定したこと・意見が一致していないことについて、主張し、同意を得ようとする

これまで述べてきたカネの用法の多くは聞き手に対する配慮の表現となるが、相手が言ったことに対してカネを使うと反論や疑いを差し挟んでいるような印象になる場合がある。それ故、(92) や (93) のように相手と話し手の意見が食い違っていることが明らかになった場合にこのカネを用いると、畳みかけるように自分の考えを述べる印象になる。カナにはこのようなニュアンスはない。

(92) 「(略) 違いますか？」

「違う」

「(略) 私はあなたが持ち去ったものだと睨んでいますが、違いますかね」

「違うって言っただろう」(震える牛)

(93) ロトコブ 絶対出来ない。人間は完璧ではないから無理です。共産主義も基礎はユートピアの解釈です。全員がたくさん頑張って同じ給料をもらう。でも人間がそれを出来なかった。だから共産主義が崩壊しました。



大井 そうではなくて自分一人の話としてのユートピアっていうのは不可能なん  
ですかね。

ロトコブ 個人的な意見は出来ない。†<sup>注6)</sup>

● 驚き・いらだち・不満・不信

同様に、(94) から (99) のように、話し手と聞き手が前提を共有していない場合には、カネは話し手のいらだちや怒り、不信を表す強い問いかけとなり、それを相手に確認・同意を求めていることから、相手に対する批判や非難の場合には特にそれが強調される。その際はカネーと語尾を伸ばして発音されることが多い。

(94) (間違い電話に抗議するために) どこにかけてるんですかね。†

(95) (ATMでの失敗) このタイミングでミスるかね!?!†

(96) 本気で辞めてくれませんかね。†

(97) サトシさんいい加減ポケモンマスターになってくれませんかね。†

(98) 「どうしていつもうちのすき焼きを嗅ぎ付けるかね」(震える牛)

(99) (自分に対するいらだち) いったい今までなにやっていたんですかね。†

そこから、(100) のような反語の用法も生まれる。

(100) 自分の期待通りに動かないと気に食わない上司に部下がついてきますかね。†

● 自分の状況・窮状を理解してある行為をしてもらうよう依頼する表現。

(101) から (103) は、話し手と聞き手の理解や情報に不一致があるということを前提として、自分の窮状を訴え、わかってもらおうとする表現となるが、話し手が自己の正当性を聞き手に確認または同意要求している印象になり、押しつけがましさを感じさせる場合もある。

(101) なんとか言ってやってくれませんかね†

(102) なんとかありませんかね。†

(103) そうですかねえ。†

以上の考察から、ここで、先のカネの定義を一部修正することにする。

(104) カネは話し手が疑いをもったり判断を保留したりしていることについて、話し手や聞き手の記憶や知識、感情や意向などの認識と照合せながらも最終的な結論を出さず、その認識を聞き手に属するものとして聞き手に示し、さらには同意や確認などの反応を求めたりするもの

このように、カナが話し手にとどまる、それ故基本的にその疑いを自分の領域に置き、

自分で答えを探そうとする表現であるのに対し、カネはカナにはない聞き手指向性を持つことから、その情報をまず自分で「こうなのではないか」と考えた上で、聞き手に投げかけ、その情報を聞き手がアクセスできるもの、あるいは聞き手に属するものと位置づける。その結果、聞き手を巻き込んで、聞き手の同意や確認を得ようとする表現、話し手自身の判断を含むより傾きを持った表現でありながら、最終的判断は聞き手に委ねる表現であることがわかった。それ故、断定せずに疑問という形で相手に投げかけるという意味ではNPのストラテジーであるという側面もあるが、カナに比べて話し手と聞き手が同じ基盤に立って、情報を共有していると話し手が考えていることを表し、PFに配慮したPPとして、距離の近さ、同意や共感を表す、親しさの表現ともなりうるし、両者の意見が食い違ったとしても、お互いのfaceが傷つくのを緩和することができる場合もある。

一方で、PPよりもNPが求められる相手や話し手と聞き手が明らかに合意していないような状況、あるいは話し手が結論を出すべき場面で用いられると、勝手に聞き手を巻き込み、聞き手の領域に入り込んで来るようななれなれしさや図々しさ、強引さや押しつけがましさ、あるいは無責任さを感じさせ、失礼と受け取られることもあるということになる。

## 6. おわりに

本稿では、カナとの違いも含め、カネの意味や機能、またこれが用いられる動機等について考察した。その結果、カネは話し手や聞き手の記憶や知識、感情や意向などの認識と自分なりに一致させながらも最終的な結論を出さず、その認識を聞き手に属するものとして聞き手に示し、さらには同意や確認などの反応を求めたりするものであることが明らかになった。また、カネはPP・NP両方の面を持つが、話し手と聞き手が同じ情報を共有することに重点をおいた表現であることから、カナに比べてよりPFに配慮したPPという面を持つこともわかった。それ故、適切に使われれば、相手との距離を縮める親しさの表現にもなりうるが、相手や場面、発話内容によっては失礼な印象になってしまうことになる。

今後はそのような状況ごとに実際の受け手の印象を明らかにする必要がある。また、状況・用法を問わず、カネ自体に不快感を抱く人がいることも事実であり、この点も注意が必要である。さらには、イントネーションによっても印象が大きく変わる可能性もあるが、本稿ではその点にも触れることができなかった。

このような点を今後の課題としてさらにカネの用法を明らかにしていきたい。

### 【注】

- 1) 人力検索はてな 生活人生相談 <http://q.hatena.ne.jp/1222821591>
- 2) [http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question\\_detail/q10110253275](http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q10110253275)
- 3) 表は筆者。
- 4) 筆者が熊野（1999）の表1と表2組み合わせたもの。なお、普通体の「かね」の前の○×は丁寧体の例にならって筆者が付けた。
- 5) †はインターネットや実際の会話で使用された用例であることを表す。
- 6) ユートピアって目指しちゃいけないんですか？たろちんワールドカップキックオフ！～ドイツ人東大生ロトコブに、ダメ人間代表がインタビューで挑む

[http://webmagazine.gentosha.co.jp/fusianasan/vol226\\_index.html](http://webmagazine.gentosha.co.jp/fusianasan/vol226_index.html)

- 7) 一方ダロウカと類似の表現であるデハ（ジャ）ナイデスカの普通体であるデハ（ジャ）ナイカについてはジャナイカナの形も可能であるが、このダロウとジャナイカの違いについては本稿では立ち入らない。
- 8) 東洋経済ONLINE インパクト対談「猪子さん、マッキンゼーは嫌いですか？（上）（下）、2012年11月13日・20日掲載  
<http://toyokeizai.net/articles/-/11686> ・ <http://toyokeizai.net/articles/-/11795>

### 【参考文献】

- 安達太郎（1999）『日本語の疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- 熊野七絵（1999）「文末の「かね」の意味・機能 — 「疑いの表現」としての位置づけ—」『広島大学留学生センター紀要』 pp.31-41
- 鈴木睦（1997）「日本語教育における丁寧体世界と普通対世界」田窪行則編『視点と言語行動』くろしお出版
- 滝浦真人（2002b）「ポライトネス理論の展開」1～12（月刊言語31-1～5, 7, 13）、大修館
- （2008）『ポライトネス入門』研修社
- （2013）『日本語は親しさを伝えられるか』岩波書店
- 田窪行則・金水敏（1996）「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3-3 pp.59-74
- 仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会（2003）「第8部 モダリティ」『現代日本語文法4』くろしお出版
- 橋本修（1992）「終助詞複合形の意味分析」『国語学会平成4年度春期大会要旨』 pp.133-138
- 南不二男（1985）「質問文の構造」『朝倉日本語新講座4』朝倉書店
- 宮崎和人（2002）「終助詞「ネ」と「ナ」」『阪大日本語研究』14 pp.1-19
- 山岡政紀・榎原功・小野正樹（2010）『コミュニケーションと配慮表現』明治書院
- 山田准（1991）「情報論における『カネ』の機能」『THE KANSAI LINGUISTIC SOCIETY』11 関西言語学会 pp.113-118
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*: Cambridge University Press.

### 【用例の出典】

- 相場英雄 『震える牛』小学館 2013
- 池井戸潤 『ようこそ、わが家へ』小学館文庫 2013
- 雫下脩介 『火の粉』幻冬文庫 2004
- 濱嘉之 『警視庁情報官』講談社文庫 2010
- 誉田哲也 『ハング』中央公論社 2012
- 宮部みゆき 『返事はいらぬ』新潮社 1994
- 群ようこ 『挑む女』文春文庫 2000

**On the Usage of *kane*, Japanese Sentence-Final Expression  
– from the Perspective of Politeness**

KUMAI, Hiroko

In this paper, the author discusses the meaning and usages of *kane*, a Japanese Sentence-Final expression and the reasons why it is used, focusing on its role in politeness. As a result, *kane* turns out to be an expression which shows the hearer that the information belongs to the hearer or further requires the hearer's reaction such as agreement or confirmation after conforming the memory, knowledge, emotion or intention of either the speaker or the hearer to the speaker's recognition without drawing a conclusion. It is also found that *kane* is an expression of both Positive Politeness and Negative Politeness, but compared to *kana*, it emphasizes the fact that the speaker and the hearer are on the same ground, and thus the aspect of PP is more dominant. So if used appropriately, it can be an expression of closeness, but if used when NP is more appropriate than PP or when the speaker and hearer are clearly opposed to each other, it might be considered to be over-friendly, pushy or intrusive, giving an impression of crossing into the hearer's territory. It can also be considered to be irresponsible, if used when the speaker is expected to express his or her own conclusion clearly. Therefore, attention should be paid depending on who the hearer is or what kind of situation or topic it is in order to avoid being rude.